

が停泊している。我々はこの船で日本に帰ることができ
るのだ。感涙にむせびながら乗船を待った。

米軍、ソ軍の引き継ぎを終えていよいよ乗船である。

一歩一歩棧橋を登るうれしさ、一生忘れ得ぬ感激の思い
出である。十月二十一日夕刻、信濃丸は懐かしい舞鶴港
に着いた。青々とした日本の山々、畑、田、敗戦といえ
ども代わらぬ祖国、十年ぶりに見る日本の姿である。復
員局の方々の出迎えて、小舟で棧橋に上陸した。「お帰
りなさい。ご苦勞様でした」と出迎えの人々の声の中
に、我々は舞鶴援護局の平収容寮に入った。消毒、入
浴、新しい被服の支給を受け、久しぶりに畳の上で横に
なった。スピーカーが報じる、再会の歌、うれしさと喜
びで一夜を過ごし、すべての引き揚げ業務を終えて、十
月二十四日特別列車で郷里に向かった。

忘れられない抑留

栃木県 林 英治

奉天で敗戦の日を迎え、ソ連軍の軍門に降り、北陵に
集結させられた私たちは、貨車で粗食に耐え、二か月余
りも費やし、昭和二十年十一月にトルキスタン州ハンタ
ギー村着。廃墟のような鉛鉱山の地で収容所生活が始
まった。

三千平方メートルくらいの敷地にバラックの棚組みが
なされ、四隅に歩哨が交替で見張る望楼があり、作業に
行くときは五列縦隊の前後に歩哨つきで往復監視され
る。まさに虜囚の身の悲しさを思うにつけ、ぞっとする
心境です。十一月ということで、見渡す山に緑はなく、
岩石の山肌を見ると寒さの厳しさが、一段と身を刺し
た。

鉛鉱山の作業生活が始まり、かつての戦時体制を思わ
せるような三交替労働についたが、食糧が少なく、しか

も質が悪い。体力の維持がやつの生活だ。食べることに以外に何も考えられないわびしい毎日でした。黒パン（三百五十グラム）と飯盒のふたに軽くカーシヤ（粟カユ）と、トマトの塩漬けを湯でうすめたスープ献立が代表的なものであり、食べても満腹感にはほど遠く膝がガクガクで働くのもつらく、口に入るものならん何でもいとわれない気持ちでした。

煙草は市販のマホロカ（煙草の葉と幹を砕いたもの）のバラ売りがあったが、私たちには手に入らず、野草を乾燥して新聞紙に巻き吸ったが、煙草の味は全くなく、マッチなどにはもちろんない。小さな空缶に燃綿を詰め、火打石で燃綿に火を起こし、煙草の火種とする生活の知恵を発揮する原始生活を体験しました。

電気もなく粗衣粗食にして、毎日、朝食後、一斉に収容所の屋外に出され、各自所持品を入れて置く背のう検査が行われ、目ぼしいものは没収された。むなししいわびしい時間でした。二十日か一か月に一度の入浴も、湯に身体をひたすのではなく、原始的蒸し風呂形式であり、薪で玉石を焼きバケツで水をかける。その冷えた玉石を

また焼くという反復で蒸気はたまらず、二十人位ずつ入るが、首より上だけが蒸されるが、体は寒くてブルブルという状態。若干のぬるま湯で体を拭く程度でした。

このような生活だからシラミが大発生し、日夜苦しめられた。入浴している間に衣服は一応シラミ退治するために蒸されたが、不潔極まる生活ですから数日してシラミの攻撃が始まる。ソ連人は発疹チフスに弱いから警戒して、私たちの入浴時に看護婦が陰毛を切れないカミソリで剃りあげる。時々ヤボンスキー（日本人）は、マールンキ（小さい）と言って、信じられない面持ちで首をかしげている。ハンタギー収容所では二、三回剃られた記憶がある。

夏は粗末な材料でつくられた二段ベッドの柱の割れ日に南京虫が生息していて、薄暗い裸電球が取り付けられ消灯すると一斉に枕元に集まり、首回りを食われて寝れない。手拭をぬらして枕元に置き寝てしまう。朝起きると首回りが何か所も食われ、一週間くらいは痛くてたまらない。室内は暑く、汗をかくと体内より首回りにシラミがはい上がってくるのをつかまえては、恨み骨髓とば

かりにつぶすけれども、シラミの攻撃はやまない。不潔極まる生活には本当に疲れた。

比較的健康の者は鉛の鉱山作業に、その他の者は坑外作業にされた。私は鉱山作業に配属されたが、坑内施設は廃坑状態のようで足のくるぶしぐらいは常時水びたし、鉛鉱石の採掘、トロ保線班、角材運搬等、サク岩機で岩盤に二メートルくらい深く穴を数か所あけ、八時間労働の最後にソ連人がダイナマイトを仕掛けて爆破させ、次の交替要員が採掘に入坑するわけですが、換気が悪く、ガスが抜けず、作業開始までには三時間くらいかかるが、残り五時間で八時間労働のノルマを達成しなければ帰れないので、上半身は裸で全力を投入する。まことに粗食でありながら、過酷な極限状態の重労働でした。

サク岩機の下での作業に当たったときは、鉛鉱石の粉塵が鼻穴の結膜に付着して呼吸ができなくなるので、何か掃除をしなければならないという状態で、サク岩機士はたくましい体軀の者でも、振動と鉛毒の影響が四か月も続けると体調に変化をきたし交替した。

ハンタギーで二か年働き、レンゲル炭鉱で一か年と、三か年を鉱山生活をして、昭和二十三年七月、今度こそ日本に帰れるということで、貨車で二十日間揺られナホトカに到着したが復員ではなく、戦友をばらばらにして知らない戦友と混成し、労働大隊に編成され港建設、石切り作業等、復員船を遠くに見ながら冬期の寒いつらい坑外作業、収容所に帰れば粗衣粗食の上、毎晩七時より九時まで、二時間は政治サークルと称して赤化運動の嵐が吹き、戦友間に信頼というきずではなく、猜疑心による密告が横行し、大衆の面前でつるし上げられ、反動分子の烙印でも印されたら、毎日の労働、政治サークル等締めつけが強く、心身ともに極限状態の一年二か月を曲がりなりにも乗り越えて、昭和二十四年十月に復員しました。